

第 1 回 フォーラム「グローバル・ミドル・イースト」

米・露・エジプト・日本…

－新冷戦構造の下での戦略的選択肢とは？－

2014 年 9 月 24 日(水)

東海大学校友会館 ー富士の間ー

目次

	Page
1. 問題提起	3
2. ゲスト紹介	4
3. 「6月30日革命」と現在のエジプト外交政策	7
4. エジプト人の親米度と対米関係、日本の対米関係	10
5. 中東諸国の分割、イスラム過激主義	12
6. 「百万の疑問」、「アラブの春」を利用した2つのシナリオ	15
7. 質疑応答	17

(補遺)新冷戦構造と日本

発言者紹介

○ゲスト: カマール ガーバツラ Mr. Kamal GABALLA 元アハラーム紙副編集長(現論説主幹)、2001～04年東京支局長を経験した親日家。

○聞き手: 新谷恵司 Mr. Keiji Shintani アラビア語会議通訳者、有限会社エリコ通信社代表。カイロアメリカン大学修士中退

通訳 高橋敦(エリコ通信社) **通訳助手** 斎藤ヌールハンゆき(同)

(講義録作成:高橋敦、 監修:新谷恵司)

1. 問題提起

(新谷) お足元の悪い中、たくさんご来場いただきまして誠にありがとうございます。今、なぜ「新冷戦」なのでしょう。ソ連の崩壊からもう 25 年という、大変長い月日が経ってしまいました。それは冷戦とは呼ばないのだ、というご意見もあるでしょうし、ずいぶんと時代が変わってきている、ということはあるかも知れません。しかし、ウクライナを見てください。そして何より、シリアを見てください。イラクやイランも強い影響を受けております。米国とロシアの対立、これが新たな紛争を世界中に生み出し続けています。

もし、ロシアがアサド政権を支えていなかったら、中東は今頃どうなっていたでしょう。シリアだけで、一千万人と言われる難民、避難民が出ています。こんなことにはなっていなかったはず。昨日ですか、2 日前と言うべきですか。アラブ諸国が米軍と一緒にイスラム国を爆撃するという事態に発展していますが、こういうことは起きなかったでしょう。米国なのか、ロシアなのか。世界は、そしてとりわけ中東は、この選択に今、迫られているような状況がございます。エジプトは、この中東では最も親米国家と言わなければならない。元々長い間米国の陣営に属していましたが、またこれからは米国の陣営に属するはず。しかし、この眺めというものが最近少し変わって参りました。微妙な変化があると言わなければならない。昨日、ガーバツラさんを空港にお迎えして、車の中で少しお話をしましたけれども、過去非常に大変なことが米国とエジプトの政府の間ではあったんだ、ということでした。

9 月 17 日、ほんの数日前のことですが、エジプトとロシアは総額 35 億ドル、約 3800 億円という武器調達契約を結びました。こんなことはムバラク時代には考えられなかったことです。30 年間、毎年、13 億ドルの軍事援助をもらい続けてきたエジプト。それが急にロシアとこういう契約を結んだというのは驚愕です。シーシ政権はどういう風に考えて、こういうことをやったのでしょうか。またエジプト市民は、そのことをどう捉えているのでしょうか。

シーシ政権というものは、私の個人的な見方を言いますと、人類をイスラム過激主義の魔の手から救う、英雄ではないかという見方も出来ると思います。米国がイスラム世界に戦争を仕掛けて、イスラム過激主義を煽りました。米国の攻撃がなければ、こんなにもイスラム過激主義が蔓延することはなかったでしょう。ムバラクさんが言いました。「ビンラディンを殺しても百人のビンラディンが出てくる」のだと。その通りのことが起きました。そういったとばっちりを受けてきたのが、エジプトを筆頭とする穏健なイスラム国家であり、アラブ諸国であります。しかし今やエジプトは、UAE やフランスと組んで、リビアに軍事介入するのではないか、と言うことがささやかれています。リビアが過激主義者の温床となっているのです。対テロ戦争で、再びアサド政権と手を組むのではないかととも言われています。もう後のないアサド政権を、シーシ政権がこれを助けるといったようなことが起こるのでしょうか。

この他にも、今日はゲストのガーバツラさんに聞いてみたい問題がたくさんあります。